

「繁慶の六十余州鉄砲奉納は石見銀の安全輸送祈願でないか」 補足

— 「刀剣界」第67号（令和5(2023)年10月発行）の小論に対して—

伊藤三平

紙幅の関係で、詳細に記述できなかったことや参考文献に関して、ここに補足します。

1. 繁慶の六十余州鉄砲奉納が大坂の陣戦勝祈願の通説について

＜参考＞『日本刀の歴史と鑑賞』（小笠原信夫 著 1989年5月）の「繁慶」の項

- ①日御碕神社に現存する繁慶の書状から徳川家が全国の一宮に鉄砲の奉納を命じたことがわかり、それらの鉄砲の製作年紀は大坂の陣の前であり、この奉納祈願は大坂調伏祈願のためであったとの説がある。書状は元和4年霜月二十六日と、大坂夏の陣が終わってからであり、おかしいが、これは受領書をもらったのが大坂夏の陣の事後処理が済んだ後とみると筋が通る。この説は立証不可能な推論の域を永久に出るものではないが、一概に否定できるものではない。
 - ②転向は鉄砲の需要が無くなったと解する向きもあるが、繁慶は徳川家と関係が深く、元和年間に職を転じるほどの社会的理由はないと考える。繁慶の個人的理由だろう。
 - ③作風、仕立ても異風で天才的である。何かシャーマン的な性格を感じる。
- ★小笠原先生とは、拙著『江戸の日本刀』を上梓する前に、先生が江戸新刀、私が新々刀の分担で共著の構想があり、江戸新刀のことについて私が調べたことをお伝えしていた。先生は私の石見銀の安全輸送祈願説に賛意を示され、「そもそも大坂の陣は家康が戦勝祈願をするまでもなく、勝つことはわかっていた戦いだから、おかしいと思っていたんだ」と喜ばれた。『日本刀の歴史と鑑賞』における一節は、通説を裏づけるために苦労して執筆された結果と思うが、そもそも元和4年書状は受領書ではなく、祈願の依頼書である。受領書は2項参照。

2. 繁慶の翌年のお礼状

＜参考＞「相国様と鉄砲の奉納」辻本直男著、「大日光 60」（昭和63年2月）より

- ①日御碕神社には先の書状の翌年「未春十九日」（元和5年は未年で正月19日）に繁慶から日御碕検校（神社の事務総括者）への書簡（「御返報」と宛先に明記）が現存している。
- ②原文の読み下し文は辻本氏の論に準拠する。「尊書かたじけなく拝見仕候、殊に御札是に返贈下され候、恭しく存じ奉候、仍て御鉄砲之儀 本願是に御座候故申上候得ば則ち御下りなされ其元にて社納へ御納なさるる由目出度存じ奉候、次に隠岐の国 龍宮へも御納めなさるる由殊に過分に存じ奉候、委細之儀は本願へ申上候 恐惶謹言」
- ③意味は辻本氏解釈を元に、伊藤が補っているが次の通りである。「尊書をかたじけなく拝見しました。添えて神社の御札を贈っていただき、恭しく受け取りました。なお鉄砲のことは本願でありますから（重ねて）申し上げましたら、国許へ下って日御碕神社へは社納していただきありがとうございます。次に隠岐国の大宮並びに竜宮へも納めて差し上げるとの返事であったので誠に有りがたいです。詳細のことは本願へ申し上げます」（この論文には原文も掲載されている）

3. 日御碕神社の元和四年書状の「相國様」について

＜参考＞「相國様と鉄砲の奉納」辻本直男 著（「大日光 60」昭和 63 年（1988）2 月）

- ①清堯が全国の一宮に鉄砲を奉納したが、そこにある「依 相國様仰」を秀忠としたが、家康と考える。相國は本来は太政大臣のこと。平清盛、足利義満、豊臣秀吉が任じられ、家康も逝去の一ヶ月前に受けられる。
 - ②清堯は家康逝去（元和 2 年）後の元和 4 年に、この荣誉の称号を書簡に採り上げている。家康が生存中であれば「大御所様」と書いたと思われる。
 - ③ただ相國は一般の大臣の称としても使われる。秀忠は慶長 10 年に征夷大將軍と同時に内大臣に任じられている。（秀忠が太政大臣になったのは元和 9 年）
- ★相國様について、辻本直男氏は元和 4 年時点で該当する人物は徳川秀忠と一度は論じたが、この論文では、上記理由から徳川家康としている。これは、辻本氏が奉納の理由を大坂の陣の戦勝祈願と考えた為に、整合性を取る為に家康としたと考えられる。
- なお『日本刀大百科事典』（福永酔剣著）は「繁慶」の項で秀忠としている。
- 私も、抱え主でもあり、祈願者でもある徳川將軍の大事な称号は間違えないと考える。元和 4 年時点で該当する人物は徳川秀忠である。

4. 奉納した各神社の御神徳

＜参考＞『全国一の宮めぐり ビジュアル神社総覧』所載「一の宮とはなにか 諸国筆頭の神々」（藺田稔 著）より

- ①畿内中心のいわゆる二十二社制度と地方諸国における一の宮・総社の成立は平安朝の半ばから成立したが、国家の法的な制度ではない。
- ②一の宮や総社も地方官である国司がその主要任務である神社祭祀に便宜上定めたもので、慣習上広まった制度。地方に下向した国司がまず国内の諸社を巡拝し、中央の神祇官に代わり年ごとに奉幣する順序を一の宮、二の宮、三の宮と各社を振り分ける習いとなったなかで、とくに諸国の一の宮が重んじられるようになる。（地元勢力の変遷で首位の一の宮をはじめ順位が変動する例もみられ、また鎌倉から江戸の歴史の変遷で、一の宮さえ神社を特定することが難しい例もある。今日でも諸国六十八州に対し八十近い一の宮が数えられる）
- ③総社とは国内の諸社祭神をすべて一社にまつり込めた形の神社で、国司が一括して国内諸神を祭祀できるように国衙近くに創建する例であるから、これは諸国に等しく普及したものではない。
- ④上野國一の宮貫前神社（経津主神、比売大神）交渉成就、必勝祈願、養蚕機織
摂津國一の宮住吉大社（底筒男命、中筒男命、表筒男命、息長足姫命）禊払い、歌道上達、海上守護
出雲國一の宮出雲大社（大國主大神）縁結び、福德守護、医薬守護
隠岐國一の宮水若酢神社（水若酢命）隠岐開発、日本海鎮護、醸造守護
隠岐國一の宮由良比女神社（由良比女命）豊漁、海上守護、家庭円満
- ④石見銀山のお膝元の石見國一の宮は物部神社（宇摩志麻遲命）鎮魂祈願、病氣平癒、文武上達 だが、『神社辞典』によると物部神社は鉾山に関係があると記されている。

★石見国一の宮物部神社には、銀の輸送ではなく、銀の増産と、鉱山採掘の安全を祈願したのではなかろうか。

★書状に記載の奉納先神社の御神徳には、出雲大社を除いて「海上安全」「日本海鎮護」が含まれている。奉納された鉄炮が現存する住吉大社は「海上守護」。

5. 日御碕神社の社格と小野家

＜参考＞日御碕神社（ウィキペディア）より

①上下の 2 社あり、上の宮を神の宮、下の宮を、日 沈 宮ひしずみのみやと称し、2 社を総称し日御碕神社（日御碕大神宮）と呼ばれる。

②日沈宮の名前の由来は、創建の由緒が、伊勢神宮が「日の本の昼を守る」のに対し、日御碕神社は「日の本の夜を守れ」との「勅命」を受けた神社である事による。

③古くから朝廷からの崇敬が厚く、鎌倉時代以降も幕府からの崇敬があり、社殿の修造が行われている。出雲松江藩初代・堀尾忠氏は、社領 780 石余を与え、徳川幕府も 600 石を与えている。山陰において出雲大社に次ぐ大社とされる。

④日御碕神社社家の小野家は、戦前は、出雲大社の千家・北島両家や、石見一ノ宮の物部神社（島根県大田市）社家の「金子家」と並び、全国 14 社家の社家華族（男爵）の一つに列する格式を有していた。

★野田繁慶は三河の神社の野田氏の出身と考えられる（12 参照）。日御碕神社、高野山への奉納に際して書状の筆跡、内容は、当時としては学識があった人物と思われる。日御碕神社と何らかの関係を持ったことで小野姓を授かったのではないかと思う。

6. 海の神への祈願方法

次の 2 つの方法がある。①海神投供…海中に品物（大事なもの、場合によっては人）を投げ込んで神に捧げる祭祀法、②陸上祭祀…海神を島や岬などの陸地において祭る方法（住吉大社や厳島神社や宗像大社の沖の島、厳島神社など）

海神投供のことは、『日本書紀』や『古事記』において日本 武 尊やまとたけるのみことの身代わりに弟 橘 媛おとたちばなひめが相模海中に身を投げて海を鎮めた話、紀貫之が『土佐日記』の中で土佐国司の任を終えて帰京するときに大坂の住吉沖合で風が強くなり、船頭の勧めで貴重品の鏡などを投げ込んで風を鎮めたことで知られている。

7. 銀山の歴史

＜参考＞島根県教育庁文化財課世界遺産室の「世界遺産 石見銀山遺跡とその文化的景観」より

1309 年 延慶 2 年 初めて石見銀山が発見されたという（「銀山旧記」）

1526 年 大永 6 年 博多の商人・神屋寿禎が石見銀山を発見する（「銀山旧記」）

1528 年 享禄元年 大内義隆が矢滝城を築き、石見銀山を支配下におく（「銀山旧記」）

1531 年 享禄 4 年 川本を本拠とする小笠原氏はいふきほうが銀山領有（「銀山旧記」）

1533 年 天文 2 年 石見銀山で灰吹法による銀精錬がはじまり、以後国内の他鉱山に広まる。大内氏銀山を奪回（「銀山旧記」）

1556～1562年（弘治2～永禄5年）

毛利氏と尼子氏が互いに銀山の争奪戦を展開し、やがて毛利氏が支配する

1568年 永禄11年 ポルトガル／ドラードの日本図に「銀鉱山王国」の記載がある

1585年 天正13年 豊臣秀吉が関白となる。このころから毛利氏と豊臣氏の共同管理

1600年 慶長5年 関ヶ原の戦いの後、徳川氏が領有

1601年 慶長6年 大久保長安、初代奉行となる

1602年 慶長7年 年産4千貫＝15トンの銀を産出する

1603年 慶長8年 安原備中、年3600貫＝13.5トンの運上を納め、家康に謁見（「銀山旧記」）

1624年 寛永元年 銀山全体の銀産出量が減少し始める（年間2200貫＝8.2トンを納めた）

1673～1682年 延宝元～天和2年 銀産出量がさらに減少する（10年間の平均産出高261貫＝980キロ）

1675年 延宝3年 石見銀山領は代官統治へ格下げ

8. 銀の搬出について

＜参考＞「歴史 石見銀山の歩み」（大國晴雄 著）より

- ①積み出し港は大永6年から永禄3年くらいまでは鞆ヶ浦（大内氏時代）、次いで永禄5年頃から沖泊を含む温泉津、長安は温泉津を重視し、慶長10年には温泉津を地銭（土地税）免除にする。この後、陸路、尾道への輸送になっても銀山の外港として栄える。
- ②長安は銀輸送の安定性を重視して中国山地越えルートも開く。

＜参考＞「世界を動かした石見銀山」（島根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室パンフレット2007年）より

石見銀山産出銀の輸送は、江戸時代になると、温泉津港からの船による搬出をやめ、陸路を4日間をかって瀬戸内海側備後・尾道まで輸送しました。尾道・鞆から大阪銀座までは船舶で輸送していました。

＜参考＞「週刊日本の街道88 石見銀山街道 尾道から温泉津へ」（平成16年2月）

銀山街道では、備後と出雲の境の赤名峠は難所で、銀の運搬には1回の輸送に馬270～280頭、人足400人を要したと伝わる。

9. 世界に知られた銀山

＜参考＞「世界を動かした石見銀山」（島根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室パンフレット2007年）より

- ①大航海時代、石見銀山は日本の銀鉱山としてヨーロッパ人に唯一知られた存在であった。16世紀半ばから17世紀前半の全盛期には、世界の産銀量の約3分の1を占めた日本銀のかなりの部分が石見銀だったと考えられる。石見銀山で産出される銀は高品位で信用が高く、海外にも多量に輸出され、アジア諸国とヨーロッパ諸国を交易で結ぶ原動力となっていた。

- ②フランシスコ・ザビエルはインドにいるロドリゲス神父に宛てた手紙の中で「カスチリア（スペイン）人は日本をプラタレアス群島（銀の島）と呼んでいます」と紹介。
- ③ 1595 年にベルギーで作成された「テイセラ日本図」には石見銀山が表記されている。
- ④イギリス商館長リチャードコックスの日記には「ソーマ銀」という日本銀についての記述があるが、これはかつて石見銀山は邇摩郡佐摩村にあり「佐摩銀山」と呼ばれていたからである。

10. 大久保長安

＜参考＞『戦国人名事典』（阿部猛、西村圭子編）

- ①天文 14 年～慶長 18 年（1545 ～ 1613）。父は武田家の猿楽師大蔵大夫。天正 10(1582) 年に徳川家康に仕えて財政面を担当。天正 18(1590) 年、武蔵八王子に陣屋を構え、領国内検地などで活躍。
- ②慶長 6(1601) 年、甲斐代官と石見銀山奉行を命じられる。慶長 8(1603) 年、石見守となり佐渡奉行を兼任、慶長 11(1606) 年に伊豆、慶長 13(1608) 年には南部の金山を監督。
- ③他に美濃の検地、一里塚・伝馬宿の設立などの交通政策、さらに松平忠輝家の内政を司る。
- ④慶長 18(1613) 年に 69 歳で死去。死後に生前の罪が暴露（大久保長安事件）。
- ★交通政策にも大きく関与したから、銀山街道の発想も生まれ、実現させたと考えられる。
- ★大久保姓を名乗るのは武田家滅亡後に大久保忠隣に仕えて、能力を認められた為と考えられる。

11. 大久保長安事件

＜参考＞『日本の歴史⑫江戸開幕』藤井譲治著）の「特集 出頭人・大久保長安」より
大久保長安が慶長 18(1613) 年に死去すると、生前に金銀隠匿・幕府転覆計画などがあつたとして、一族が切腹させられて家は断絶、関係があつた大名・旗本など多くが連座の罪で改易、切腹。（背景として幕府内の路線対立なども噂されるが詳細は不明）
★こういうことで事績が抹殺されているから、駿府や八王子での繁慶との関係なども不明。

12. 繁慶の伝承

＜参考＞『日本刀大百科事典』福永酔剣著の「繁慶」の項より

- ①家康が元和 2(1616) 年に死去すると、繁慶は（駿府から）江戸へ召し帰された。八王子に鍛冶場を与えられ、炭も年々千俵与えられることになった。（『新刀名作集』内田疎天・加島勲著より）
- ②炭拝領については本多作左衛門重次の文書があるというが、彼の没年（文禄 5 年）からすると怪しい伝承。
- ③その後、^{あかがり} 厩家が名主をしている神田鉄砲町に移り、鍛刀。（『新刀銘盡』神田白龍子著、『古今鍛冶備考』山田吉睦著など）
- ④寛永元(1624) 年に高野山金剛三昧院に二振の刀を奉納・現存。
- ⑤水戸家の『御腰物元帳』の記載には御矢倉方公役をしたことがある。（「刀剣会誌」中

央刀剣会)

⑥墓は静岡の安西寺にあった。(『静岡縣郷土研究 第六輯』沼館愛三著)しかし、寺が明治40年頃に移転し、無縁墓として廃棄。

★①、②、③、⑥は裏づけがとれない伝承。

<参考>野田氏の出自は『姓氏家系大辞典 第三巻』(太田亮著)の「野田」氏の項

①三河の野田氏、寶飯郡^{ほい}白鳥大明神慶長十七年八月棟札に「野田善清」(野田善清堯の誤記か)を載せ、碧海郡^{へきかい}櫻井村白山社神主に野田氏、社領五十石也などの記載がある

★神官野田氏の出身と考える。現存する書状の筆跡、内容から当時としては学識がある。神官の関係で徳川家の祈願を頼まれ、日御碕神社の社家小野家とも関係ができて、小野姓を名乗るようになったと考える。

13. 安原伝兵衛(田兵衛)知種^{よりしげ}(因繁)

<参考>『石見銀山歴史文献調査報告書Ⅲ 安原備中関連史料集〜』という史料がある。

①(石見銀山資料解題『銀山旧記』)には「この結果(慶長7(1602)年の釜屋間歩の発見)銀山は繁栄し、安原が召し使う者だけで千人を超え、…」や「大坂の陣の時(略)銀堀300人を連れて、松平正綱の陣に加わり…」などの記述がある。

②慶長8(1603)年に、一年で3600貫(13.5トン)の運上銀を産出し、家康大いに喜ぶ。伏見城で拝謁の折、「備中」の称号(官位ではない)と胴服(辻ヶ花染丁字文胴服…重要文化財)、扇子を拝領する。後に、清水寺に奉納する。

③慶長19(1614)年、大阪冬の陣に銀堀人足300名と参戦、お堀の水抜きを指揮する。

<参考>「レファランス協同データベース」というサイトがあり、そこに岡山県立図書館が提供した情報が掲載されている。

①『岡山県歴史人物事典』では、「安原智種」の項で掲載。通称田兵衛。諱は因繁、のち智種。備中守。都宇郡塩津村(現早島町)の出身で江戸時代初期の鉱山師。天正年中(1573～92年)に石見銀山(島根県)に移住し、石見銀山の鉱山師となり、巨大な富を築いた。智種は石見に移住した後も、郷里の産神様への信仰を維持し続け、子息や同族とともに檀那となって吉備津神社御釜殿の再建を行っているほか、早島の御崎宮(現鶴崎神社)の再建などにも大檀那となって造営、寄進している。

②『石見銀山歴史文献調査報告書3 安原備中関連史料集』には、安原伝兵衛と安原家に関する史料がまとめてある。その中に岡山県下に残る安原備中関連の棟札や金石文について記載されている。また、島根県にある安原備中墓碑や伝兵衛の肖像画等の写真が紹介されている。なお、この資料の中では、「因繁」は伝兵衛ではなく、その子にあたるのではないかと推察されている。

★安原伝兵衛の「因繁」名(資料によっては伝兵衛の子の名)の「繁」は繁慶と通字があり、繁慶が清堯銘から繁慶銘に転じた理由に関係すると思う。

繁慶と石見銀山関係の年表

西暦	以降1600年代																																		
	0					5					10					15					20					25					30				
和暦	慶長										元和										寛永														
	1	3	5	6	8	10	14	15	16	17	18	19	1	4	5	8	9	1	5	8	10														
主な出来事	秀吉没	関ヶ原の戦い	朱印船貿易開始	家康征夷大將軍	秀忠征夷大將軍	オランダと通商	イギリスと通商	大坂冬の陣	大坂夏の陣	家康没	元和の大殉教	家光征夷大將軍	奉書船制度開始	秀忠没																					
石見銀山関係（大久保長安、安原伝兵衛）	長安銀山奉行	盤屋間歩発見	伏見で銀披露	銀山 最盛期 年間15トン前後					長安没、後事件	銀山 盛ん					銀産出量が減少傾向 年間8.2トンから更に減少																				
繁慶	← 鉄砲年紀銘 → ☆ 日御碕奉納分は慶長17年紀 日御碕神社奉納 高野山に刀奉納																																		

（注）野田清亮銘で現存する鉄砲は16挺あり、内、年紀は慶長15年2月から慶長20年3月までである。日御碕神社書状にある奉納先の鉄砲の年紀は慶長17年。〈『日本銃砲の歴史と技術』宇多川武久編「野田清亮の鉄砲銘からみた武家の序列」安田修著より〉